

## ラヴィルマルケとリユーゼル（二）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁 川 英 俊

### Ⅲ ブルターニュ文学と「円卓物語」

ラリュ神父とウエールズ旅行

さて、『ルヴェ・ド・ラルモリック・エ・ド・ルエスト』*Revue de l'Armorique et de l'Ouest*への協力や『信心会の友』の翻訳、あるいは『バルザズ・ペ・ガナウエヌ・ブレイス』の出版など、『バルザズ・ブレイス』の出版後も旺盛な活動が続けていたラヴィルマルケは、『ブルトン語の未来』が発表された一八四二年には、また『古代ブリトン人の民話』*Les Contes populaires des anciens Bretons*なる大部な二巻本も上梓していた。その書物は、ひとりの女性への次のような献辞で始まっていた。

私がブリトン人の古の民話で活躍する英雄たちのことを思うときにはいつも、彼らを壮麗な儀式のうちに会さしめたあの街が、貴重な思い出に彩られて美しく眼前に立ち現れます。あなたに連れられてカーリアンの廢墟を訪れた日のこ

を思い出します。アーサー王の宮廷、彼の宮殿が建っていた丘、木蔭で覆われた城壁、いまなお「円卓」の名で呼ばれている円形劇場、カンブリアとアルモリカの友愛の両岸を我らの祖先が行き来した船によく似た、皮や柳でできた小舟が繁く下る川もまた目に浮かびます<sup>(1)</sup>。

この麗々しい献辞を捧げられた相手は、レディー・ハンヴェリー・リー Lady Hanbury Leigh。ラヴィルマルケが一八三八年から三九年にかけて、政府の使節団の一員としてウェールズを訪れたときにポンテイプールで寄宿した先の女主人だった。この訪問は、長く途絶していたウェールズとブルターニュの新たな友好関係の開幕を告げる記念すべきものだったが、ラヴィルマルケはそこで「フランス国王の使者」としてウェールズの国民的祭典「アイステズヴォッド」に出席し、文字通り熱狂的な歓迎を受けたのである。そして、レディー・リーはこの滞在中に彼が寄宿した土地の名士たちの一人だった<sup>(2)</sup>。

ともあれ、この旅の思い出とそこで触れた人々の郷土愛は、その後のラヴィルマルケの精力的な活動をさまざまな形で後押しした。たとえば、『古代ブリトン人の民話』の「序文」で、彼はこう書いている。「ウェールズの人々は自分たちの言語で書かれた数多くの新聞、雑誌、民衆的な出版物をもっている。その出版物は定期的に行われる会議が人々に与えた刺激によって生まれたものなのだ。彼の地の文学ないし歴史における重要な書物の大半は、こうした集会ののちに出版されたのである<sup>(3)</sup>」。

帰国後のラヴィルマルケが情熱を傾けたブルトン語純化運動が、このウェールズにおける先例に倣ったものであったことは、わざわざ指摘するまでもあるまい。しかもまたこれを機に、以後ウェールズは言語運動の面でつねにブルターニュが手本と仰ぐ存在ともなっていくのである。

ところで、このラヴィルマルケのウエールズ行きには、はっきりとした一個の文学的な野心があった。それはほかでもない、かつて全ヨーロッパに広く伝播した「円卓物語」の形成においてブルターニュが果たした役割を検証することである。では、彼はなぜこのような野心を抱くようになったのか。理由は、一八一五年にラリュ神父 *abbé de la Rue* が著した『中世におけるアルモリカのバルドの作品に関する研究』 *Recherches sur les ouvrages des Bardes de la Bretagne armoricaine dans le Moyen âge* の読書にあつた<sup>4)</sup>。

この著作で神父が主張していたのは、「円卓物語の起源となつたのは、数世紀にわたって伝えられてきた、すぐれたブルトン語の詩だ」ということであつた。実際、「ブルターニュのレー」と呼ばれたこの詩歌には、中世のトルヴェールたちも称賛を惜しまなかつた。しかし、にもかかわらず、今日それが伝わるのはただ翻訳によつてのみであり、それゆえ大方の論者たちはブルトン語による原典の存在を疑問視していた。ラリュ神父が試みたのは、この傾向に異を唱え、その存在を主張することだったのである。

実際、マリー・ド・フランスは十三世紀に少なからぬレーをフランス語に翻訳したし、クレチャン・ド・トロワの作品にいたつては舞台もブルターニュ、登場人物もブルトン人である。ただ原典が見つからないというだけで、ブルターニュに存在したかもしれない素晴らしい文学的伝統の可能性を否定していいはずはない。神父は来るべき新たな研究を期待しつつ、この書物をこう結んでいた。「新しい研究によつて文学の領域におけるブルターニュの貢献を数え上げ、それを郷土の誇りとするのは、ブルターニュの文学者の仕事である<sup>5)</sup>」。

このラリュ神父の呼びかけに、パリに住むブルターニュ出身の一青年は敏感に反応した。故郷ブルターニュに文学的栄光をもたらし得るこの仮説を証明すべく、青年はその後古文書学校に学び、卒業後は少なからぬ雑誌に次々と論文を寄稿する。そればかりではない。『バルザズ・ブレイス』の出版はもちろんのこと、その後のラヴィルマルケの文学的活動は

ほぼすべて、この読書をきっかけとして生まれたものであると言っても過言ではなかったのである。むろん、このウェールズ行きも例外ではなかった。それはまさにラリュ神父の仮説を証明する絶好の機会だったのである。その証拠に、彼は出発前にオックスフォードのジーザス・カレッジから写本を閲覧する許可を得ていた。

では、ラヴィルマルケはこの旅行からいったい何を掴んで帰ってきたのか。『古代ブリトン人の民話』はその一端を教えてくれる。

### 『古代ブリトン人の民話』

『古代ブリトン人の民話』は、全体として大きく二部に分かれていた。最初の部分では、「円卓物語」の代表的登場人物たち、すなわちアーサー、メルラン、ランスロー、トリスタン、イヴァン、エレック、ペルスヴァルが十二世紀から十三世紀にかけての英仏の諸ヴァージョンをもとに紹介され、次にウェールズの三つの民話、すなわち『オウエインあるいは泉の淑女』 *Owen ou la Dame de la Fontaine*、『グレイントあるいはハヤブサの騎士』 *Ghéraint ou le Chevalier au Faucon*、『ペリデュアあるいは魔法の器』 *Perédur ou la Bassin magique* の仏訳が注釈とともに続いていた。

しかし、ここでそれ以上に重要なのは、第二巻巻末に付された「ブリトン語で書かれた原典の批判的考察」 *Examen critique des sources bretonnes* という著者自身の手になる論考である。そこでは、ラヴィルマルケがウェールズ旅行からどのような成果をもち帰り、またいかにしてそれをラリュ神父の仮説の証明に取り入れたのか、その詳細が明らかにされていた。以下、その内容を見よう。

著者はまず、十八世紀以来のケルト文学の評価について一瞥する。すなわち、それは真面目に取り上げるに値しないものと相場が決まっております、とくにアルモリカのブルトン人の詩歌にいたっては、その存在を信ずる者など誰もいなかった

のである。のみならず、ブリトン語は詩歌に向かないとさえ言われていた。この評価に一石を投じたのが、ウェールズ人のマヴィル Myvyr、ことオーエン・ジョーンズ Owenn Jones だった。一八〇二年、彼は祖国の文学的業績を集めて『マヴィリアン』 *Mavrian, Archaiology of Wales* なる書物を発表する。この書物は以後、それを贋造とする多くの異論に出会ったが、また少なからぬ大家の賛同を獲得しもした<sup>6)</sup>。

たとえばシャロン・ターナー Sharon Turner は、そのアングロ・サクソン史の末尾でこの書物の真正性を擁護し、またフォリエル Fauriel も、シャロンの仕事以来、『マヴィリアン』に異論の余地はなくなったとして読者に判断の修正を求めた。が、こうした見解はいまだ一般的であるにはほど遠い、と著者は言う。実際、最近シュレーゲル Schlegel は「ウェールズの古詩は近代の発明であり、ブルトン語による文学は存在しなかった」とする前世紀の説を繰り返し、フォリエルやオーギュスタン・テイエリらの批判精神の欠如をこう難じた。「フォリエル氏の言葉はあらゆるケルト的幻想の擁護者たちの格好の武器であり、オーギュスタン・テイエリ氏もまたブリトン起源の闇の中で唯一の確実な道案内を見失い、パステイツシュの伝統という鬼火の後を行ってしまったのだ<sup>7)</sup>」。

ラヴィルマルケはこうした批評的状况を確認した上で、当のテキストの信頼性を証明すべく、最初に「詩」を、次に「散文」を組上に載せる。

まず「詩」に関して、著者はその真正性を主張するシャロン・ターナーの所説を要約的に紹介する。たとえば、六世紀から十二世紀にかけてウェールズにバルドが存在し、その詩が古文書ないしは口承の形で後世に伝えられたこと。その内容がたんに人物・事象に止まらず、風俗習慣・衣装に至るまで伝えられる史実とびたりと符合すること。かつ、その韻律形式が詩人の生きた時代のそれに対応すると文献学的にも証明されていること、等々である。そのうえで、著者はタリエシン Taliesin、メルズイン Merzin、アナイリン Aneurin、ヒヤワツヘン Lywath-hen の諸作品を、種々の文献を比較しつつ

簡略に紹介していた<sup>(8)</sup>。

次に「散文」について、著者はこれを「三段歌唱とバルド伝承」、「年代記」、「民話」の三つに分類する。まず「三段歌唱」に関しては、その形式の古さが強調され、言及されている出来事も多くはサクソン人の侵入の時代に遡ることが指摘される。それはまた初期バルドの教義の一部を成し、元来韻文で作られていたと思われるが、散文文化に当たって「円卓物語」などの影響を被り内容が変えられたという。同様に「バルド伝承」も韻文から散文に移行したと思われるが、著者によれば、そのうちの幾つかはいまでもブルターニュの農民の民話のうちに見いだせるのだという<sup>(9)</sup>。

一方、「年代記」において話題になるのは、ただひとつ『列王史』*Brut y Brehined*のみである。著者はまず、この年代記の原著は九三〇年にブルトン人によってブルトン語で書かれたと主張する。それは、十二世紀にアルモリカを旅したオックスフォードの副司教ウォルター・カレン *Walter Calen* によってブリテン島に伝えられ、彼は粉飾を加えつつそれをウエールズ語にし、ジェフリー・オブ・モンマス *Geoffrey of Monmouth* に伝えた。一方、モンマスは彼に請われてそれをラテン語にした。そして、それが今日『ブリタニア列王史』*Historia Regum Britanniae* の名で広く知られる書物なのだ、と著者は言う。もつとも、のちにウォルター自身もそれを自らラテン語にし、さらには逆にそれをウエールズ語に直しもした。かくて『列王史』は、原著よりもむしろ翻訳によって有名になり、粉飾された異本が幾つもできることになった。その間にブルトン語の原著の方は行方不明となり、今日わずかに残る翻訳の写本は、最古のウエールズ語訳でもせいぜい十二世紀までしか遡らない。要するに、名高いモンマスの『ブリタニア列王史』やウエールズに残る写本は、本来ブルターニュに起源をもつ書物の不正確な似姿にすぎないのである<sup>(10)</sup>。

さて、著者によるこうしたブルターニュの優位性の主張は、次の「民話」の項目でも続く。ラヴィルマルケは、ウエールズの民話集『マビノギオン』*Mabinogion* について、それが散文のみならず歌にもとづくものでもあることに触れ、か

つてその歌はウェールズとブルターニュで共有されていたのだと指摘する。そればかりではない。彼はまたその真の起源がブルターニュにあると主張してもいたのである。なぜか。それはほかならぬブルトン語で書かれた『列王史』が、そうした歌が伝えた伝承に基づいているからであるという。その証拠に、いまに残るブルターニュの民衆歌や伝説は『列王史』の原著の雰囲気の色濃く伝え、アーサー王の姿もまたウェールズの詩人が伝える歴史的人物とはまったく異なる詩的な要素を付与されている。いうなれば、ウェールズから伝来したアーサー王の事跡はブルターニュで詩的変容を遂げたのだ。そして、十世紀か十一世紀になると、今度はその民間伝承が海を越えて大陸から島へと渡り、十二世紀のウェールズで散文として残されることになったのである<sup>(11)</sup>。

むろん、舞台がウェールズへと移ることで、そこに描かれる風俗習慣も変わった。実際、『マビノギオン』が伝える習俗は紛れもなくウェールズのものである。しかし、にもかかわらず、そこにはなおアルモリカの名残が散見される<sup>(12)</sup>。いや、風俗のみならず言語にも、アルモリカ独自の言い回しや表現が満ちているのだ、と著者は言う。その証拠として彼は『ペリデュア』の一節をウェールズ語とブルトン語で引用し、さらには「今日のわれらがコルヌアイユの田舎の住人は、現在のグラモルガンの農民よりもはるかに容易に『マビノギオン』を理解できるのだ<sup>(13)</sup>」とまでつけ加えて、こう結論した。

要するに、ウェールズはアーサー王の登場する『マビノギオン』の主題をアルモリカの民衆詩人たちに与えたのだ。彼らはそれを武勲詩の形にして拡大し、装飾し、小説化したのである。島のブルトン人たちはこうした歌を自分たちのナショナルな伝統の単なる発展と見なし、熱心に収集したのだ。ウェールズの民衆詩人は最初のうち、ただ言語を変えただけで内容は変えずに歌っていたが、やがてそれを散文にし（これにはかなりのヴァリアントがある）、さらに文字

に移して今日あるような形にしたのである<sup>(14)</sup>。

要するに、ラヴィルマルケによれば、詩的存在としてのアーサー王はその起源をすべてブルターニュにもつのである。

シャーロット・ゲスト夫人との確執

ところで、「円卓物語」の成立に関してウエールズの貢献を過小評価するこの結論は、また『マビノギオン』の翻訳者シャーロット・ゲスト夫人への不当な軽視とも重なり合っていた。実際、この書物で特徴的だったのは、ゲスト夫人にたいする極端なまでの言及の少なさであった。しかしラヴィルマルケにとって、夫人はたんに『マビノギオン』の英訳本の翻訳者であっただけではない。ウエールズ滞在中に自宅に招待し、食事や寢床を提供してくれた家庭の女主人でもあった。にもかかわらず、その名は本来登場してもいいはずの献辞のなかには登場せず、また文中で謝辞を捧げられることもない。たしかに、ゲスト夫人とラヴィルマルケの関係には謎が多い。たとえば、彼は初めて彼女と会ったときの印象をこう書き記している。「私が家に到着した晩、彼女は丁重でよそよそしいうえに、遠慮しているようにさえ見受けられました。(…)彼女と私の間には見えない壁のようなものがあつたのです(…)」ようやく彼女が打ち解けたとき、私は到着してから自分がいかに気まずい思いをしたかを率直に彼女に伝えました。彼女はこう言いました。「私はただあなたのことをいろいろと聞いていたので、普通の人と違うのかと思っただけです。今ではもう皆と同じだつてことが分かりましたから」。これがレディー・シャルロットなのです<sup>(15)</sup>。

もつとも二人の関係は、ラヴィルマルケがウエールズに行く以前から始まっていた。というのも、この最初の邂逅から数ヶ月を遡る一八三八年四月、ラヴィルマルケはパリの王立図書館でクレチャン・ド・トロワの『獅子の騎士』の一部を



筆写し、それをゲスト夫人に送っているからである<sup>(16)</sup>。夫人はそれを自分の訳書に利用した。一方、ラヴィルマルケはこともあろうにゲスト家に滞在後、その訳書の出版社に宛てて手紙を書き、自分の名前を表紙に記載してその貢献を明らかにするよう要求したのである<sup>(17)</sup>。

夫人の方も負けてはいなかった。帰国後、ラヴィルマルケが「アイステズヴォット委員会」に懸賞論文として提出した「中世ヨーロッパ文学におけるウェールズの伝承の影響」に関するレポートを一読した彼女は、一八四〇年十一月十一日付の日記に次のように書きつけた。「彼のエッセーは私には実に面白かった。私の『マビノギオン』を大幅に利用しているのに、この人はほとんどそのことについて触れていない。それどころか、彼は私が自分でその本を書いたのではないということを仄めかしてさえいる。(……) こんなことをするのは、『ペリデュア』の出版で私の先を越せなかったという悔しさからなのだ<sup>(18)</sup>」。

何が彼らの関係をぎくしゃくさせていたのか。分野を同じくする研究者同士の競争心なのだろうか。いずれにせよ確かだったのは、ゲスト夫人の翻訳がラヴィルマルケの著者の出版に先行していたことである。実際、彼女はロンドンの週刊誌『アセナウム』*Athenaeum* がラヴィルマルケの本に関する好意的な書評を掲載すると、出版社を介して、それが実際には彼女の英訳からの重訳にすぎないのだと主張し、加えて彼が自分の註を剽窃したとも訴えたのである<sup>(19)</sup>。

もつともこうした攻撃にたいして、ラヴィルマルケは彼女に正面から答えることはしなかった。のちに書物が再版された際にも、その態度は曖昧なままだった。とはいえ、ゲスト夫人の主張が理に適ったものであったことは、当時のラヴィルマルケのウェールズ語に関する知識を考えてみても明らかだった。しかもその正当性はまた、のちにブルターニュ出身の文学者エルネスト・ルナン Ernest Renan によって改めて確認されることにもなったのである。

## IV 『バルザズ・ブレイス』の変貌

## 『バルザズ・ブレイス』第二版の登場

さて、『古代ブリトン人の民話』を出版したラヴィルマルケには、さらに大きな仕事が二つ残っていた。ひとつは、サン・ブリウーの出版社から新版を依頼されたルゴニーデックの『ブルトン語・フランス語辞典』 *Dictionnaire Breton-Français* の執筆であり、いまひとつは、ほかならぬ『バルザズ・ブレイス』の新版の出版だった。この新しい版はすでに初版の出版直後から計画されていたが、実際に出版されたのはそれから六年後の一八四五年のことであった<sup>20</sup>。

第二版は初版と同じ二巻本で、左ページにブルトン語、右ページにフランス語という体裁の点でも変わりはなかった。しかし、内容には大きな変化があった<sup>21</sup>。なによりも、新たに付け加えられた歌が三十三篇もあった。なかでも「歴史的な歌」の変化は著しく、三〇篇が新しい歌であった。初版でこのセクションで収められていた歌は三十一篇であったから、その数は一気に倍増したことになる。一方、「愛の歌」の増補はわずかに一篇、「宗教的な歌」については二篇にすぎなかった<sup>22</sup>。いずれにせよ、歴史的な歌が大幅に増えることによって、ラヴィルマルケが目的としていた「歌によるブルターニュの歴史」はいっそうその精細さを増した。主なものを見よう。

たとえば、新版の冒頭には新たに『連』 *Les Sères* という歌が置かれていた。この歌は五、六世紀の歌として初版の冒頭に置かれた『グエンフランの予言』よりもさらに古く、少なくとも四世紀にまで遡るとされた。内容はドルイドと子供の間で交わされる問答歌で、子供が一から十二までの数字を挙げて質問すると、ドルイドが各々の数字に対応する森羅万象の事柄を教えるというものであったが、著者によればローマ征服以前のドルイドの教義を伝える貴重な資料だということだった<sup>23</sup>。

ブルターニュの代表的な伝説を歌った『イスの町の水没』*Submersion de la Ville d'Is*もこの版から加わった。アイルランド、ウェールズ、ブルターニュの三地域に共通するこの伝説について、著者はその地域ごとの相違を述べつつ、収録された歌が九世紀の写本に収められている、五世紀から六世紀にかけて実在したウェールズのバルドの手になるヴァージョンと明らかな共通性をもつことを指摘していた<sup>(24)</sup>。

伝説の英雄アーサー王の姿を伝える歌もあった。意外なことにこの英雄の名を伝える歌は、初版には一篇も収録されていなかった。著者自身が「ブルターニュの人々はいつの時代にも、六世紀から今日に至るまで、さまざまな機会にこの人物に関する伝承や詩歌を語り継いできた<sup>(25)</sup>」と語り、「序文」の結びにおいても「アーサー王は死んではない」という父祖伝来の愛国的なりフレインを引いていたにもかかわらずである。新しく加えられた『アーサーの行進』*La Marche d'Arthur*なる歌は、この欠落を埋めるものだったのである。しかしそれは、著者自身がウェールズの学者の助けを借りずしては理解できなかったと告白するほどブルトン語とは異質の表現を多く含み、もともとウェールズ語で歌われていた歌が七世紀の移住の際にブルターニュに伝えられたのであろうと推測された。暁のモンターニュ・ノワールの山頂を進むアーサー王の軍隊のイメージを喚起するその歌は、実際に歌われるときには「ブルトン人のキリスト教徒のように死なねばならぬとも、けっして死に急ぐことはすまい！」という最後の節を三度繰り返すのを常としていたという<sup>(26)</sup>。

ところで、この歌も含めて、新しく収録された歌はそのナショナルな色彩において際立っていた。たとえば『アーサーの行進』の前に置かれた『ガリア人のワイン』*Le Vin des Gaulois*は、血とワインとを対比させながら、六世紀に繰り返されたブルトン人とガリア人の戦乱の様を描いていた。また初版においてナショナルな性格をもつ数少ない歌のひとつであった『レズ・ブレイス』*Lez-Breiz*は、ブルトン語で「レズ・ブレイス」、すなわち「ブルターニュの大黒柱」と綽名された武將を歌ったものだったが、新版ではそれが九世紀にフランク王ルイ敬虔王に刃向かったモルヴァンだと特定され、

歌の数も初版ではひとつであったのが一気に五つに増えていた。続く『ノミノエの租税』*Le Tribut de Nomenoë*はフランス人への納税の義務からブルトン人を解放した九世紀の英雄ノミノエの功績を顕揚し、『アラン・ル・ルナル』*Alain le Rend*は十世紀の名将アラン・バルブルトの面影を伝え、『ハヤブサ』*Le Faucon*は十一世紀のブルターニュ公ジョフロワ一世の殺害を機に侵入した外敵に対する民衆の反乱を歌っていた。

百年戦争に材を採った歌も多かった。フランス軍の陣地に火を放ったジャン・ド・モンフォールの妻ジャンを歌った『炎の女ジャンヌ』*Jeune-la-Flamme*、ベンブrou率いるイギリス部隊とブルトン人ボーマノワール率いるフランス部隊との激突を描いた『三〇人の戦争』*La Bataille des Trente*、フランス軍、イギリス軍、そしてブルターニュの民衆をそれぞれ狼、雄牛、アーミンに擬した『エルミーヌ』*L'Hermine*、ブルターニュ出身の英雄デュ・ゲ克蘭の活躍を歌った『デュ・ゲ克蘭の代子』*La Filleule de du Guesclin*と『デュ・ゲ克蘭の封臣』*Le Vassal de du Guesclin*、シャルル五世にたいして蜂起したブルトン人を指揮すべくイギリスから帰還したジャン・ド・モンフォールを歌った『白鳥』*Le Cygne*である。

一方、『プルイエの若者たち』*Les Jeunes hommes de Plouyé*では、土地の慣習を変えようとするフランス人の専横への抵抗から十五世紀のコルヌアイユ地方で起った農民反乱が歌われ、『ルイ十一世の小姓』*Le Page de Louis XIII*にはフランス王の小姓であった弟をギロチンに架けた理由を王に問い質す誇り高きブルトン人の姉の姿が描かれていた。

また『カトリック同盟軍』*Les Liguens*と『ポンカレックの死』*Mort de Pontcalec*は、ともにブルターニュ公国の再興を狙った二つの企てに材を採っていた。前者はメルクール公を擁立し、カトリック同盟の大義をブルターニュの大義に結びつけて兵を挙げた十六世紀末の出来事を、後者は完全な独立を得るべくスペイン王と結んでフランスに反旗を翻した十八世紀の陰謀を歌っていた。

ブルターニュとウエールズの国家を越えた民族的一体感を歌った『サン・カストの戦い』*Le Combat de Saint-Cast*とブルスト沖におけるイギリスのフリゲート艦の炎上を描いた『水先案内人の歌』*La Chanson du pilote*は、ともに英仏間の戦争をテーマとし、それぞれ七年戦争とアメリカの独立をめぐる戦いにおける出来事を伝えていた。

革命後の歌もあった。たとえば『青色派』*Les Bleus*は、ブルターニュにおける共和派の残虐非道な行為の数々を述べ立て、王党派のカトリック教徒たちのあくなき抵抗への意思を表現していた。また「歴史的な歌」の最後に置かれた『過ぎ去った時代』*Le Temps passé*は、ラヴィルマルケ自身がまさにそれが作られる現場に居合わせたものだったが、「この世はブルトン人にとってはもはや哀惜と心痛しかない<sup>(27)</sup>」と歌うその歌は、世相の変化を嘆き、古き良き時代を懐かしんでいた。

では、こうした歌が加えられた『バルザズ・ブレイス』第二版が提示するブルターニュの歴史とはどのようなものだったのか。端的に言って、それは「外敵」によって脅かされる「祖国」の抵抗の歴史にほかならなかった。実際、そこには敵対者たちへの直接的な呪詛や憎悪の表現が少なくなかった。以下、目につくまま挙げてみよう。たとえば『レズ・ブレイス』では、

私は反乱者ではない、神にかけて誓うが、裏切り者でもない。

裏切り者は呪われる！ 王とフランク人は！<sup>(28)</sup>（……）

ここに眠るのはレズ・ブレイス。ブルターニュが続くかぎり、彼の名は知られるだろう。

彼はやがて叫びつつ目覚め、フランク人を追うだろう<sup>(29)</sup>。

あるいは、『ハヤブサ』では、

人々は弾圧され、国は異国からの侵略者、ガリアの国の侵略者によって蹂躪された。(……)

国は打ちひしがれ、反乱が起こった。若者は立ち上がり、老人も立ち上がった。雌鳥とハヤブサの死の後、ブルターニユは燃え、血塗られ、喪に沈んだ<sup>(30)</sup>。(……)

激しい炎、狂おしく燃える炎に、鉄のフォークは溶け、骨は音を立てて崩れた。まるで地獄に落ちた人の骨のように<sup>(31)</sup>。

『デュ・ゲ克蘭の代子』では、

そう言うと彼は長い剣を振り上げた。

そしてイングランド人の頭に一撃を喰らわせ、その身を真つ二つにした。(……)

圧制者の砦が破壊される、イギリス人には戒めだ。

イギリス人には戒めだ、ブルトン人には吉報だ<sup>(32)</sup>。

さらに『ルイ十一世の小姓』で交わされる会話は、

王族にはいかなる紳士もいません。フランス人については言うまでもないことです。

なぜなら、残忍な人よ、私は知っているからです。あなた方が血を与えるより奪うのを好むことを。

— ご婦人よ、国に戻りたければ、口を慎まれるがいい。(……)

こんな諺がある。これは真実だ。「ブルターニユには人はなく、いるのは野生の豚ばかり」。

— それが真実ならば、私は別の真実も知っています。「フランス王であっても、ルイは悪意に満ちた嘲笑者」<sup>33</sup>。

また『カトリック同盟員』では、

ブルトン人は立ち上がった。農民であれ貴族であれ。(……)これが兵士たちだ。ユグノー教徒に抗して真の信仰を守り、イギリス人やフランス人、この国を戦乱よりもさらに荒廃させる人々に抗してバス・ブルターニユを守るためにここに集められたのだ<sup>34</sup>。

さらに『青色派』では、

犬が吠えているぞ！ さあ、フランス人の兵士がやって来る！ 森へ逃げろ！ 群れを前に追い立てろ！

われわれコルヌアイユの人間は、これからもいつも農民を抑圧する悪党どもを堪え忍ばなければならないのか。

奴らはわれわれの美しい娘たちを辱め、母親を、子供を、男を殺めた。(……)

奴らは貧しい人の家に火を放ち、領主館を破壊した。奴らは畑で、草原で、麦を燃やし、稗を燃やした。(……)

奴らはバス・ブルターニユの美しい谷を荒廃させた。かつてはかくも豊かで、かくも青かったあの谷を。かくて、い

まやそこでは、人の声も家畜の声も聞こえない<sup>(35)</sup>。

例はさらに増やすことができよう。いずれにせよ、敵意が向けられる相手は時代に応じて「ガリア人」「フランク人」「フランス人」「イギリス人」とさまざまに変わったものの、いずれの歌でも防衛すべきものとして歌われているのは祖国ブルターニュであり、またそこに住む敬虔なカトリック教徒だったのである。

それにしても、新版ではなぜこれほどまでにナショナルな歌が増えたのだろうか。

#### ナショナルな歌と山人たち

新版には「前文」と「序文」の間に、新たに「はしがき」*avant-propos*が挿入されていた<sup>(36)</sup>。そしてこの「はしがき」は、歌集の成立について幾つかの興味深い事実を教えてくれる。ラヴィルマルケはまず自らの歌集が内外で受けた高い評価について四ページにわたって詳述した後、次のように書いている。

一般から受けたこうした好意的な評価のため、私は新たな版を準備しなくてはならなかったが、その仕事はブルトン人たちの協力のおかげで容易になった。彼らの好意により、私はこうして真摯な検討にも耐え得る歌集を出版することができたのである。これを見れば、第一版にはいかに欠落があったかがお分りいただけるだろう。とりわけ、そこではナショナルな歌が少なかった。幾つかの歌のタイトルや歌詞の一部が口にされるのはよく耳にしてはいたが、結局それを収集することはできなかったのだ。では、今度はどのようにしてそれを手に入れることができたのか。私は低地に住む人々に訊ねて回ったが成果はなかった。大方の人は知らないと言った。私にそのことばを疑う理由はなかった。と



いうのも、これまで彼らに歌を頼んで拒まれたことは一度もなかったからだ。好戦的などころのほとんどない彼らの性格から見て、私は彼らが自分の先祖が活躍しない歌にはあまり重きを置いていないのだと納得した。山のなかでは住人の気質はまったく違ったが、それでも私の懇願は最初のうちはあまり好意的な結果を生まなかった。もつとも道端で呼び止めて質問を浴びせかけた人の目のなかに、あるいは何か教えてくれるかもしれないという気配を読み取りはしたのだが。しかし私は彼らにとって赤の他人だった。ひとりやっやって来たところで、山人たちは警戒心が強かった。そのうえ「都会人士」が歌を探して田舎を歩き回っているという図は、彼らにしてみれば奇妙なものであったろう。たとえどこかの紳士が声を掛けたとしても、腋にもっているのは猟銃であって紙挟みではなかったのである。(……)しかし、領主館や司祭館が私を助けてくれた。この二つの道徳的な力を前にして、農民の疑念は消え去り、その舌はほぐれた。こうして彼らの信頼を獲得していくにつれて、私はなぜ彼らがそんなに用心深かったのか、その隠された理由を知ったのだった<sup>(37)</sup>。

つまり、ナショナルな歌が存在するということは夙に知られていたし、その収集は当初から著者の目的のひとつだった。にもかかわらず、それを初版に収録することができなかったのは、ひとえに著者がそれを収集できなかったというたんなる物理的な理由のせいだったのである。そしてそれが新版で可能になったのは、収集の対象を山人たちにまで広げたことと、なによりも「貴族」と「聖職者」の力添えのおかげだったのである。ラヴィルマルケはこう続ける。

軽率にも私が彼らに向かってその一節やタイトルを洩らしてしまったナショナルな歌こそは、彼らをもつとも大切にしていた当の歌だったのだ。彼らはしばしば、そうした歌には何かしら不可解で畏怖すべきものがあると感じており、

しかも歌の意味が必ずしもすべて理解できるとはかぎらないだけに、なおさら強い印象を受けていたのだ。要するに、彼らはそこに隠された恐ろしい一個の政治的綱領を見ていたのだ。よく理解できないとはいえ、昔から迷信じみた畏敬の念をもつてその歌を扱ってきたのだ。一人の老人が、こうした感覚を山の人間に特有の素朴で比喻に富んだ言い方で私に語ってくれた。最初に知り合ったとき、彼が私にたいしてしめした警戒心には驚いたと口にしたとき、彼はこう言ったのだ。「まず、鸞を捕えたいと思つたら、怯えさせてはいけない。人が口笛を吹いているのを見つけたら、鸞は鳴くのを止め、飛び立ってしまう。これで、なぜ人が歌いたがらない歌があるのか分るだろう。そうした歌の幾つかには、「不思議な力」があるんだ。分るかね。血は滾り、手は震え、しかも鉄砲までが震えだすんだよ。ただその歌を聴くだけでね。幾つかの歌には、キリスト教徒の敵を猛り狂わせ、血管を破裂させんばかりにする特性をもつ語や名前が含まれているんだ。それを歩きながら「青」の連中に向かって歌っていると、連中はまるで火薬を混ぜた強烈なワインを飲んだ若駒のように飛び跳ねたものさ。夜、共和派の連中が焼き払った領主館の中庭で、焚き火を囲んでその歌に合わせて踊っていたときなんか、信じてもらえるかどうか分らないが、後ろに束にして並べられていた鉄砲や棒や農具の鉄製フォークが、まるでそんな風に並べられているのに飽き飽きしたとでも言わんばかりにがたがたと揺れだしてね。子供たちを元気づけようと低地でその歌を教えていたときには、二〇里も向こうにいたはずの「青」の連中がそれを聞きつけて、すぐに役場に知らせに行つた。役場の連中は夜中に抜け道を走つて来るようなことはせず、人をやって私たちが何を歌っているのかを聴きに行かせた。もし外で待ち伏せしていたら、スパイが忍び足で中庭に入り、扉の鍵穴や窓の隙間に耳を押し当てるのが見えたことだろう。翌朝、屋敷は兵士たちに包囲され、住人は老若男女を問わず皆街にしょつ引かれてギロチンに架けられたんだ」。

私は納得した。そして、山人の寡黙さの理由もまた理解した。さらに敵ばかりでなく、歌を歌った味方にも死者を出

したその歌を実際に聴かせてもらってからは、さらに深く納得した。その歌は十二世紀にわたるブルトン人のあらゆる愛国的な記憶を呼び覚ますものだったのだ。英雄や騎士たちの記憶、それに近代の記憶を伝える長い伝統の鎖に、アーサー王からジョルジュ・カドゥダルに至るまでの、栄光に彩られたひとつひとつの軍事的な出来事が詩的な後光を与えていたのだ。太古の人々から伝えられた、いまや誰も使わぬ戦いのことばこそ、農民がその力を恐れる「魔法のことば」だったのである（というのも、彼らにはもうその意味を理解する術がないのだから）。彼らにとってもはや価値のなくなったブルターニュの古き英雄たちの名前こそ、不思議な効力をもつと信じられていた名前だったのだ。ギロチンのは、抑圧されたブルターニュの永遠の抵抗を賞賛する声を封殺すべく歌い手の喉を切ることで、逆にブルトン人にその歌を神聖視させる結果になったのだ<sup>38</sup>。

これが、ラヴィルマルケの語るナショナルな歌の収集の顛末だった。「真摯な検討にも耐え得る」と歌集の信頼性を誇った著者の言にしては、あまりにロマン主義的なその内容に驚かざるを得ない。しかし、のちにその「学問性」が論争的となる『バルザズ・ブレイス』の「はしがき」が実際にはこのようなものであったということは、ここで確認しておいた方がいだろう。当時の民衆歌集一般を成立させていた時代的な雰囲気は、紛れもなくロマン主義的なものだったのである。

しかしながらこの記述は、その真実性とは無関係に確実にひとつの事実を伝えていた。それはラヴィルマルケが収集したナショナルな歌の稀少性である。つまり、それは誰もが容易に耳にできるようなものではなく、しかるべき場所としかるべき人間関係に恵まれた者だけが聴くことのできる、きわめて例外的な性質のものだったのである。

ところで、著者は「はしがき」の最後で、ブルターニュの「領主」と「司祭」にたいして次のような深甚の感謝を捧げ

ていた。

繰り返し声を大にして言わねばなるまい。この新版のなかでもっとも重要な歌を収集することができたのは、ブルターニュの司祭や領主たちのおかげなのだ、と。読者はこの歌集のなかで、彼らの名を歌い手の慎ましやかな名前の傍らに見いだすであろう。しかし、私はここでさらに彼らに感謝の気持ちをを表したいのだ。ふだんはただその肉体と魂の苦痛を和らげるために小教区の信者たちを訪れるいかに多くの優れた聖職者たちが、私の要求に応じて好古学者として彼らのもとに赴き、人々の信頼を勝ち得るために私が払わねばならなかった困難を取り除いてくれたことか。貧しい人や病人を治療し施し物を与えているいかに多くの領主館の高貴な夫人たちが、ふだんは不幸な人々を迎えたり私のために彼らを呼び集めたりする部屋を、ブルターニュの詩と音楽のための本物の田舎の芸術学校に変えてくれたことか<sup>39</sup>。

もちろん、ここで言われていることの事実性を検証する手段はもはやない。しかし、初版の際にすでに貴族のネットワークを存分に活用し、かつ篤いカトリックの信仰をもっていたラヴィルマルケであってみれば、その内容を疑う理由もまたない。実際、記録に拠れば、ラヴィルマルケは一八四〇年代初頭にコート・デュ・ノール県のマエル・ペステイヴィアン周辺を訪れ、また詳細は明らかではないが、同じ頃モンターニュ・ノワールやモンターニュ・ダレにも足を運んでいる<sup>40</sup>。また歌集の「論拠」にも、歌の提供者としても少なからぬ山人の名前が挙げられている。たとえば、「私がこの歌を得たのは、山のケルゲレス村のジョゼフ・フォツホという農民からである<sup>41</sup>」(『ノミノエの税金』)。「モンターニュ・ノワールでは、いまなおこの出来事についての軍歌が歌われている。私が負っているヴァージョンはブランゴロという名の、コアトスキリウの木靴職人である<sup>42</sup>」(『ハヤブサ』)。「以下の軍歌は、タントニアックやジョルジュ・カドウダルの仲間の

ひとりである、モンターニュ・ダレのケルホアン村に住むミケル・フロツホというに教えてもらったものである<sup>(43)</sup>。「『白鳥』」。さらに、『過ぎ去った時代』ではまたこんなふうにも言われている。

現在のブルトン人のうちでもとりわけ精悍な人々、なかでも山人たちが抱いている愛国的な感情は、いまでは無骨な愛情表現という形でしか表に現れてはこない。父親たちを反乱へと駆り立てたナショナルな精神が息子たちを蜂起させることはもはやない。しかしその精神は、ある意味で彼らを現在に対抗させているのだ。(……) こうした不満分子の群れは、期待を裏切られ、一般法の新たななくびきに苛立ちながらも、伝統的な物語や毎日の会話やナショナルな歌によって、山の農民たちのうちで昔ながらの愛国精神を保っているのである。

私は先年、昔の人が本のなかで書き留めているように、最初の独立の記憶がどんなに民衆を熱狂させるものかをこの目で確かめる機会を得た<sup>(44)</sup>。

山人との経験は、たしかに初版の採集では得られなかった成果をラヴィルマルケにもたらしたのである。あるいは彼は、そこにレダンの印刷物にも「汚染」されない理想的な「民衆」を見いだしたのだろうか。もともとラヴィルマルケがフィールド・ノートで伝えるそこは、けっして期待されたようなユートピアではなかった。彼はこう書いている。

バス・ブルターニュの農民たちは、前世紀まではまだシャルルマーニュやロランの異教徒たちとの戦の記憶を保っていた。私はやって来るのが遅すぎた。四〇年前ならボワベルトロの森には木靴職人の組合があつて、ブルターニュの歴史をすべて韻文で吟じてくれたものだ。(……) いまでは森は伐採され、木靴職人も鳥とともに姿を消してしまった。

若者や老人はこう答える。子供の頃、母親は英雄の歌のリフレインで私たちをあやしてくれたものだ、と。(……) 衣装にしたところで、昔ながらの衣装を纏っているのは老人だけで、若者たちが着ているシャツは襟が耳まで届く醜悪なものなのだ<sup>(45)</sup>。

時代の変化は、すでにブルターニュの山奥にまで、確実に浸透していたのである。

## V 『バルザズ・ブレイス』以後のラヴィルマルケ

### 高まる名声と私生活

『バルザズ・ブレイス』第二版は初版と同様に好意的に迎えられた。発売後数ヶ月で再版されたほどだから、商業的にも成功と言ってよかった。幾つか書評を引こう。たとえば、一八四六年五月の『コレスポンダン』*Le Correspondant*、オザナムは次のように言っていた。「いまやグリム氏もデイフェンバック氏もエリソン氏も、ド・ラヴィルマルケ氏のテキストを古典として扱うことをためらわない。かつて非常に強大で、またいまなお生き続ける一民族の歴史を再構築するという、長い間誰もなし得なかった仕事をするための基礎資料としてそれを扱うことをためらわないのである<sup>(46)</sup>」。

また『ジュルナル・デ・サヴォン』*Journal des Savans* の五八月号では、こう絶賛されていた。「集められた歌の真正性に関しては、まったく疑問の余地もない。出版社の誠実さとブルターニュの知識人すべての同意という精神的な保証に加えて、その歌が遠い昔から実際に伝承されてきたものであることは、この分野ではもつとも公平で権威のある人々によっても認められているのである。フランスではフォリエル氏、ドイツではかの有名なヤーコブ・グリム氏とフェルディナン

ド・ウォルフ氏である<sup>(47)</sup>」。

さらにより広範な読者を誇る『両世界評論』でも、それは次のように評されていた。「ブルターニュの全歴史はイギリスやフランス自体にたいする独立の闘いだつた。そうである以上、この誇り高き抵抗のナシヨナリテの英雄たちがブルターニュの歌で好んで歌われたとしても驚くにはあたらないのではないか。闘いの日、山の頂で軍隊の先頭に立つのは偉大なるアーサーであり、その名はドイツにおいてフレデリック・バルブールスの名がもつたのと同じ威光を帯びて、民衆の想像力のなかに留まり続けたのである<sup>(48)</sup>」。

内容に大幅な変更があつたとはいへ、歌集の評価は衰えを知らなかつた。さらにラヴィルマルケには、実人生でも華やかな話題が相次いだ。出版の翌年の一八四六年には、ブリズーとともにレジョン・ドヌール勲章を受勲。同年十一月七日には、破棄院判事の娘セバステイエヌ・マリー・アンヌ・クレマンヌ・タルベ・デ・サブロン Sébastien-Marie-Anne-Clémente Tarbé des Sablons と結婚している。翌一八四七年七月には最愛の母を亡くすが、その五日後には「アカデミー・フランセーズ」から『バルザズ・ブレイス』第二版を出版した功績を称えて、千五百フランの賞金を授与されてもいた<sup>(49)</sup>。精力的な仕事ぶりも相変わらずだつた。懸案だつたルゴニーデックの『ブルトン語フランス語辞典』の新版をサン＝ブリウーのプリュドム書店から出版すると、今度はその姉妹編である『フランス語ブルトン語辞典』の準備を進め、かたわら一八四四年にレンヌで設立に携わつた「ブルターニュ協会」 Association Bretonne の考古学部門の仕事にも関わつていた。ルヴォ Levot の『ビブリオグラフィ・ブルトンヌ』 Biographie bretonne への協力、『コレスポンダン』への文献学者ジャン・ジャック・アンペール J.J. Ampère の伝記の寄稿、さらに大著『六世紀のブルターニュのバルドたち』の執筆という大仕事もあつた。

こうしたなか、ラヴィルマルケは一八四九年五月、生まれ故郷の県で国民議會議員選挙に立候補する。投票総数八万六

千のうち、彼が獲得したのは二万八百四十八票。結果は落選であった。ちなみに同じく立候補した『最後のブルトン人』の作家エミール・スーヴェストルの獲得票は、わずか四千四十八票。ラマルチーヌの応援があつたにもかかわらず、この惨憺たる結果であつた<sup>(50)</sup>。アカデミズムでは既知のものとなつていた彼らの名前も、選挙民の間ではなんら一般的なものでなかつたのである。もともとラヴィルマルケがパリからブルターニュに移り住んだのが一八四八年、つまり前年のことであつたから、この結果も無理からぬものであつたのかもしれない。

翌一八五〇年、ラヴィルマルケは生まれ故郷プレシ・ニゾンに近いカンペルレ近郊のケランスケール *Keransker* に土地を買い、新居を建築する。定礎式と落成式は近隣を挙げての祝宴であつたと伝えられている。新居は森の向こうに故郷の街の鐘樓を望み、周囲には主の若き日の縁を物語るイギリス風庭園が広がつていた<sup>(51)</sup>。

この年、早速ケランスケールの地を訪れたのが、貧民救済団体「ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」の創始者フレデリック・オザナムであつた<sup>(52)</sup>。妻を伴つてラヴィルマルケと旧交を温めた彼は、その喜びを一五〇行にもならんとする長詩にして友人のアンペールに伝えた<sup>(53)</sup>。数年後、ケランスケールの地に「ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」のささやかな協議会が設立され、ラヴィルマルケはその会長に就任する。息子ピエールの伝えるところによれば、彼は会合にも欠かさず出席し、週に一度は必ず貧者たちを訪ね、またときにその家賃を肩代わりし、死に際しては葬列にも加わるほどその活動に熱心であつたという<sup>(54)</sup>。

ところで、この同じ一八五〇年、ラヴィルマルケはまたかねてから執筆中であつた『六世紀のブルターニュのバルドたち』*Les Bardes bretons du V<sup>e</sup> siècle*を上梓する。五五〇ページを越える大著だつた。タリエシン、ヒヤワツヘン、アナリンといった古のバルドたちの詩をフランス語の対訳とともにに収録したこの書物は、歴史家オーギュスタン・ティエリから「イギリスの学者もなし得ない仕事」と絶賛され、一般的にも高い評価を得た<sup>(55)</sup>。



しかし、その三年後、ほかならぬこの著作を取り上げて、はじめてラヴィルマルケの業績を公に批判する論評が現れる。著者の名はエルネスト・ルナン。ブルターニュはトレギエ出身の、まだ二〇歳になったばかりの若者であった。

(つづく)

註

- (1) *Les Contes populaires des anciens Bretons*, W. Coquebert, 1842, I, V-VI.
- (2) このウェールズ旅行に関しては、拙論『ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(四)』、鹿児島大学法文学部紀要、「人文学科論集」第57号、二〇〇三年、を参照。
- (3) *Les Contes populaires...*, I, XIV.
- (4) この間の事情に関しては、拙論『ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(二)』、鹿児島大学法文学部紀要、「人文学科論集」第55号、二〇〇二年、七八―八四頁を参照。この拙論で、筆者はGourvilの意見を踏襲して、この読書の時期をラヴィルマルケがパリに来てからとしたが、実際にはいつのことなのか分からない。上京前に知っていた可能性もある。
- (5) Gervais de la Rue, *Recherches sur les ouvrages des Bardes de la Bretagne armoricaine dans le Moyen âge*, 1815, Imprimerie de F.Poisson, p.68.
- (6) 原著ではラヴィルマルケは続けて次のように書いていた。「ちょうど同じ頃、ひとりのブルトン人の婦人がアルモリカの農民たちの歌う民衆歌の美しさに心を奪われてその収集を始め、その息子の一人がそれを継ぎ、ウェールズの高潔な商人の書物の出版から三十五年後に、『バルザズ・ブレイス』という表題の下に「ブルターニュの民衆歌集」を発表することになったのである」(*Les Contes populaires...*, II, p.304.)。
- (7) *Ibid.*, p.305.
- (8) *Ibid.*, pp.306-318.
- (9) *Ibid.*, pp.318-321..

- (10) *Ibid.*, pp.321-323.
- (11) *Ibid.*, pp.323-330.
- (12) 例として著者が挙げるのは、喪中の女性が黄色を纏う習慣、雑色の革製の靴、男たちが着る大きな枝葉模様の縞子の服、長髪の習慣などである(*Ibid.*, p.331.)
- (13) *Ibid.*, p.333.
- (14) *Ibid.*, p.334.
- (15) Fanch Postic, «Premiers échanges interceltiques - Le voyage de la Villemarqué au pays de Galles», *ArMen*, N° 125, Novembre 2001, p.41.
- (16) *Ibid.*
- (17) Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.71.
- (18) F. Gourvil, *op.cit.*, p.96.
- (19) その証拠としてゲスト夫人は、ラヴィルマルケが参照した『ハーゲストの赤本』にはほかにもたくさんの物語があるにもかかわらず、彼は彼女の英訳にあるものしか訳していないと指摘していた。(*Ibid.*, p.97; Bernard Tanguy, *Aux origines du nationalisme breton*, vol 1, Union générale éditions, 1977, p.101.)
- (20) 新版については、すでに一八三九年十二月の *Nouvelle Revue de Bretagne* に予告がある (F. Gourvil, *op.cit.*, p.95.)。なお、『バルザズ・ブレイズ』は一八四二年から表題の *Barzas* が *Barzaz* になっていた。おそらく「バルザ」という発音を避けるためだろう (*Ibid.*, p.107.)。
- (21) 表紙には「第三版」と記され、また翌年刷られたものには「第四版」と記載されたが、実際には初版の内容に初めて手が加えられた事実上の第二版であった。(*Ibid.*, p.107.)
- (22) こうした新しい歌のかなりの部分は、すでに出版前から何らかの形で発表されていたものであった。たとえば、もっとも早い *Jeanne-la-Flamme* は一八四〇年に発表され (*Ibid.*, pp.103-104) 出版直前には「論拠」や「註」も含めた *Le Cygne* のテキストの全体が *Revue de l'Armorique* に掲載されていた (*Ibid.*, p.107.)。
- (23) Théodore Hersart de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz*, édition de 1845, t. I, p.1. (ポド' Edition de 1845と略す)

- (24) *Ibid.*, p.70.
- (25) *Ibid.*, p.83.
- (26) *Ibid.*, p.88.
- (27) *Ibid.* t. II, 275.
- (28) *Ibid.*, t.I, p.175.
- (29) *Ibid.*, p.175.
- (30) *Ibid.*, p.219.
- (31) *Ibid.*, p.223.
- (32) *Ibid.*, p.367.
- (33) *Ibid.*, t. II, pp.41-43.
- (34) *Ibid.*, p.89.
- (35) *Ibid.*, p.233.
- (36) のみならず、第二版では「前文」と「序文」にも、初版に比べてかなりの変更が施されていた。
- (37) Edition de 1845, t. I, xiv-xv.
- (38) *Ibid.*, xv-xvii.
- (39) *Ibid.*, xvii-xviii.
- (40) F. Gourvil, *op.cit.*, p.103; Donatien Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p.316.
- (41) Edition de 1845, t. I, p.185.
- (42) *Ibid.*, p.217.
- (43) *Ibid.*, p.579.
- (44) *Ibid.*, t. II, p.267.
- (45) Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.73; F. Gourvil, *op.cit.*, p.103. 上の記号は頁十

ピエールによって一八四七年頃に書かれた手帳の一部として紹介されているものである。Gourvilはこの推定には根拠がないとして、それを一八四二年と訂正している。なお彼は息子ピエールの伝記の記載ページを誤ってp.173としている。

- (46) F. Gourvil, *op.cit.*, p.111.
- (47) *Ibid.*, p.112.
- (48) *Ibid.*
- (49) *Ibid.*
- (50) *Ibid.*, p.114.
- (51) さらにこの庭にはまた本物のドルメンもあつた。このドルメンはもともと四里離れたトレヴーのコミュニケーションのラヴィルマルケ家の所有地にあつたもので、地方道路建設監督官によって県道建設に利用されそうになっていたのを、近隣の農夫たちの手を借りてわざわざ運んできたものだった。作業には十二頭の馬と三〇人の人手が必要だったと伝えられている。(P. de la Villemarqué, *op.cit.*, pp.96-98.)
- (52) オザナムとラヴィルマルケの交友は、ラヴィルマルケがパリに來た一八三〇年代前半に遡る。詳細は拙論『ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(二)』、鹿児島大学法文学部紀要、「人文学科論集」第55号、二〇〇二年、七三―七六頁を参照。
- (53) *Ibid.*, p.92.
- (54) *Ibid.*, p.93.
- (55) F. Gourvil, *op.cit.*, pp.117-119.

【付記】本稿は前号(「人文学科論集」第五八号)に掲載された拙論「ラヴィルマルケとリユーゼル―いわゆる『バルザク・ブレイス論争』について」の続編である。なお、前号ではタイトルを「ラヴィルマルケとリユーゼル(一)」とすべきところを、筆者の不注意のために(一)が脱落してしまった。お詫びして訂正する次第である。